

ね継続し、それが極まった時に量から質への転換が起こり、そこで初めてオリジナリティーが出せるのです。

しかし基本が当たり前にできるようなら、悔い改めれば吉、「まあこのくらいいいや」と情性に流されていけば凶、そうならないために「夕べに惕若たり」なのです。惕若とは恐れ震えて反省すること。つまりこの時期は、日が昇っている間は乾乾と努力する半面、日が沈んだら心静かに「きょうの自分はあれでよかったか」と正しい恐怖心、健全な警戒心で以て反省するのです。この反省を怠ってはけません。

また、同時に言葉を修める時期でもあります。人は言葉により周囲の信頼を得、どんな人物かを判断されます。将来、リーダーやその道のプロになった時、自分の真意を周りの人に簡潔明瞭かつ力強い言葉で伝えなければなりません。その素養を培う時です。

六つの成長過程で一般に最も長いのが「君子終日乾乾す」の時代です。志とは世間に押し流され、常に変容し、しばみやすきものと、「易経」にもはつきり書かれてあります。ひたすら同じことを繰り返すこの時期、多くの人は

飽きたり手を抜いたりして、「こんなものでいいや、努力はやめた」と志を忘れてしまいがちです。

日々乾乾と努力を重ね、自己反省を怠らず、潜龍の志をさらに強くした者のみが、次の「躍龍」の段階へと進めるのです。

「或躍在淵。无咎」（あるいは躍りて淵にあり。咎なし）

さあ、いよいよ大空へ飛び立とうとする直前、あとはその機を掴むばかりの躍龍の時代です。

「あるいは躍りて淵にあり」とは、ある時は躍り上がったたり、またある時は潜龍時代に潜んでいた深淵に戻ってみたりして、躍動感がある半面、まだ一定ではない、不安定であることを意味しています。淵に戻って潜龍の志を確認し、見龍の基本を思い出し、前段階で身につけた技やオリジナリティーを復習して、大空へ飛び立つシミュレーションをしているのです。

いつ大空へ飛び立つのか、その兆しを捉え、見誤らないことが一番大切です。といっても、躍龍の時代には思いがけない偶然が必然のごとく起きてきます。必要な人や情報に向こうからや

ってくるなど、とにかく不思議な出会いが続きます。ジグソーパズルで足りなかったパーツが自然と埋まってくるように、飛龍になるべくすべてが自然と用意されていくのです。

ですから「いや、自分はまだ飛龍には時期尚早です」といつても無理な話。気が満ちれば、風に押し出されるようにして飛龍へと変化します。逆に「早く飛龍になりたい」と躍起になったところで、時中でなければこれもまた無理。下手に動くこと取り返しのない失敗へと繋がるので、兆しや機を観る目をしっかりと養うことが、躍龍時代にすべきことです。

### 自ら陰を生み出す努力を

いよいよ天駆け、慈雨を降らす飛龍へと成長しました。潜龍時代から抱いてきた志を達成し、これまで身につけてきた能力を発揮して社会に貢献していく時代です。

「飛龍在天。利見大人」（飛龍天にあり。大人を見るに利ろし）

先ほど龍の傍らには必ず雲があるといいましたが、飛龍になれば雲だけでなく、いいことも悪いこともどんだん

集まって、それがすべていい方向に転じる勢いがあります。

陰陽でみると、潜龍から段階を経るごとに陽は強まり、飛龍になるとさらに強まります。物事は極まり過ぎると質的転換が起こることは先に申し上げました。飛龍の時期は、陽の極まっていく時なので、あえて自ら陰を生み出すよう努めなければなりません。

そこで「大人を見るに利ろし」です。ここでいう大人は、見龍の時の大人とは異なり、自分以外の人物、事、すべてということ。つまり自分以外のすべての人の言動や有り様から学び、じっくりと意見に耳を傾けよ、といっているのです。教える・話すは陽であり、学ぶ・聞くは陰。飛龍になるほど抜きん出た実力の持ち主ですが、だからこそあえて他者に学び、人の話をよく聞いて絶えず自ら陰を生むのです。

同時に潜龍時代に打ち立てた志を決して忘れないこと。志を忘れた時、人は欲望へ身を任せるようになります。また、新しいことに挑戦するとき、場では潜龍、何かお稽古事を習い始めれば、その道では潜龍なのです。しかし、自ら陰を生み出せず陽を極